

サンゴしょうのひみつ

ジョイ・カウリー 作

百々佑利子 訳



THE SILENT ONE

by Joy Cowley 1981

NDC 933 248P. 22cm

サンゴしょうのひみつ

定 価 1,200 円

1986年 8 月16日 第 1 刷

訳 者 ^{も も め り こ}百々佐利子

発行者 坂 本 起 一

印刷・製本 内外印刷株式会社

発行所 合資会社 ^{ふ ざん ぼう}富 山 房

東京都千代田区神田神保町1の3郵便番号101

電話 東京 (03) 291-2171(代)振替東京5-54529

Translated by Yuriko Momo ©

Printed in Japan 1986

(落丁・乱丁本はおとりかえいたします)

ISBN 4-572-00455-2

サンゴしょうのひみつ



ジョイ・カウリー 作
百々佑利子 訳



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

ジョン・フラトリー・マコーミックと
彼の両親アンとケンのために

THE SILENT ONE

by Joy Cowley

Illustrated by Sherryl Jordan

Original English language edition published

by Methuen Children's Books Ltd

Text copyright © 1981 by Joy Cowley

Illustration copyright © 1981 by Sherryl Jordan

Japanese translation rights

arranged through The English Agency Ltd, Tokyo

もくじ

*

海のおくりもの

7

ルイザおばあさん

29

ウミガメとの再会

46

敵とみかた

55

ある計画

82

たくらみ

97

わな

110

神^{かみ}がみの怒^{いか}り

139

使^{つか}い

150

村長の決断^{けつだん}

176

赤ひげ

195

わかれ

207

いいたえ

240

*

あとがき

243

さし絵
シエリル・ジョーダン

海のおくりもの

野ブタ狩りの日、ジョナシは、サンゴしょうへ出ていった。

村の人たちには会いたくなかった。

だから、竹製の自分のいかだがおいてある浜まで、林をぬけて走った。

白砂の上にいかだを引きずりながら、なみだがとめどなくあふれる。

太陽のりんかくがぼやけて、空ににじんだ。ヤシの葉が、ふるえて見える。強い風がふいてるわけでもないのに。

ジョナシはうつむいて、うでで目をこすった。

それから、海にいかだをおしだし、上にはいあがった。

ちよっとのあいだ、ひざをついてすわっていた。

けれども氣をとりなおして、かいをにぎった。そうして、湾のはずれまで、まっすぐこいでいった。

ジョナシのわきには、新品の槍がある。

レインツリーの、長くてかたい枝でつくった槍だ。

ジョナシが、自分で槍のかたちにけずり、たんねんにもようを彫り、みがきあげたものだ。ジョナシにとって、この槍はたいせつな友だちだった。

槍は、いままでになん本もつくったことがある。でも、これほどみにしあがつたものはない。村の少年たちは、いかにもうらやましそうな目つきで、この槍を見つめた。

サムが彫りものをした槍などは、くらべものにならない。アイサキのにだって、まけない。

ジョナシのつくった槍は、水にうかぶ葉っぱのように、うまくつり合いをとりながら、いならずまのように力づくよくとぶのだ。

ただこいまは、この槍を見るだけで、くやしさがこみあげてくるのだった。



ジヨナシは、十二歳さいになつていた。うでつぶしの強さは、だれにもひけをとらない。村長そんちょうがもつてもおかしくないような槍やりを、自力でつくりあげたのだ。

それなのに、なぜ、野ブタ狩がりにつれていってもらえないのだろうか？

陸りくをふりかえると、草ぶきの小屋こやが、ヤシの木かげに、よりそうようにならんで見えた。

男たちがいないので、村はしずまりかえっている。人っ子ひとりいない浜はまべで、犬がなにかをかきまわっているだけだ。

村のうしろには、けわしい山が黒ぐろとつらなっていた。

山腹さんぷくをおおうジャングルの奥おくへわけいると、滝たきがあり、けものだとか、いろいろな種類しゆるいのめずらしい鳥がいる。

あの山奥やまおくのどこかで、野ブタ狩がりにでかけた男たちが網あみをはっているのだ。

ジヨナシは、この日がくるのを、長いあいだ待ちつづけていた。

ジャングルにふみこんで一日じゅう歩きまわる野ブタ狩がりにそなえて、村の若者わかものたちが槍やりや網あみのしたくをするのを、ジヨナシは毎年毎年見えてきた。

野ブタ狩りの一行はいつも、夜明けとともに、いさんで元氣はつらつと出發する。

そして、日がくれるころ、えものをかついで村へ帰ってくる。えものは、さきをとりがらせた生木におおされて血を流している大ブタや、フジづるで四本のあしをしばられてもがいている子ブタだ。

大ブタのほうは、そのまますぐ、女たちがおこしておいた火の上であぶられて、祝宴のごちそうになるのだ。ジョナシはいつも、狩人たちのうしろにすわって、女たちの歓迎の踊りを見物した。それから、村の小さい子どもたちといっしょに、ごちそうのあまりものをもらうのだった。

野ブタ狩りのたびに、ジョナシは、自分にもいつかは、緑の山やまのくらいふところに行ける日がめぐってくるだろう、とむねをふくらませていた。

そして、きょうこそ、その日となるはずだった。

それなのに、みんなは自分をおいていつてしまったのだ。

サムはつれていつてもらえた。サムは、十三歳で、ジョナシの乳兄弟だ。あんなちび、えものもかっげないくせに。

アイサキも、いつてしまった。

エティカもだ。あのほそいうでで槍やりをなげたって、十歩さきのカヌーまでとどくかどうかわからない。おまけに、まぬけだ。

ジョナシは、自分もなかまにくわろうと走りでた。ところが、いきなり、年よりと女と子どものいるほうへ、おしもどされてしまったのである。

いったい、なぜ？

村長のむすこであり、ジョナシといちばんなかのいい友だちのアイサキが、理由りゆうをせつめいしようとした。

アイサキは、両手りょうてで、ジョナシの耳と口をふさいだ。それから山をゆびさし、ちよつとほえんで首をふり、ジョナシの肩かたをぽんとたたいた。

口のうごかし方を知らないから？　だからつれていけない、ということなのだろうか？

ジョナシは、狩人かりうとたちの出発しゅつぱつを見おくらなかった。小屋こやに帰って寢床ねどこにもぐりこみ、まるくなつてじつとしていた。むねがしめつけられるように痛いいた。ぶちまけるあいて

のいない怒り^{いか}で、頭がずきずきした。

けれども、サンゴしょうの海へこぎだすと、むねをしめつけていた痛み^{いた}がやわらいだ。海へ出れば、もやもやした気持ち^{きもち}はふきとんでしまう。

どんなにひどい苦痛^{くつう}でも、海はかならずいやしてくれる。それをジョナシは知っていた。

ジョナシは、できるだけ波^{なみ}を立てないように、かいをあやつりながら、いかだの下をすぎる海の生きものたちのすがたに見とれた。

いかだは、しだいに村から遠ざかり、となりの湾^{わん}へと近づいていった。

ゆく手に、サンゴしょうの海をわける濃紺^{のうこん}のすじが見えた。右手の陸地^{りくち}からそそぐ川の真水^{まみず}が、内海^{ないかい}を横^{よこ}ぎり、暗礁^{あんしょう}をふかくえぐって外海へ流れこんでいるのだ。

河口^{かこう}には、マングローブ^{*}が密生^{みつせい}し、そこだけあざやかな緑色^{みどりいろ}だった。

マングローブのしげみの上空には、アオサギが、ゆるゆるとつばさを上下させながら、えさをさがしている。

きょうのジョナシは、魚つりをする気分にはなれなかった。ガラスのようになめら

かな海面^{かいめん}をゆつくりすすみ、赤や緑^{みどり}のサンゴがはえている、海中ジャングルをのぞいているだけだ。

青い魚や、黄色い魚や、黒と銀^{ぎん}のしもようをきらめかせた魚たちが、サンゴの枝^{えだ}をぬって泳^{およ}ぎまわっている。かわいい小鳥^{こどり}がとびまわっているみたいだ。

人間の脳^{のう}みそにかたちがついているノウサンゴのかげの、陽光^{ようこう}がとどかないところは、茶と白のまだらもようのあるタカラガイの貝^{かい}がらが二つ、なかの住人^{じゅうにん}といっしょに、のったりうごいている。

岩^いだなでは、サクラ色のヒトデが一つ、サクラ色の光の輪^わのなかで、たくさんのでをひろげていた。

ジョナシは、光の輪^わのなかにかいをつつこんで、ヒトデをぱつとうらがえすと、にっこりわらった。

ブタ狩^がりでもなんでもやればいいさ。

どうせ、サムにけつまずいたり、エティカの槍^{やり}をふんづけたり、とげだらけのつるやイラクサのなかをほつつき歩いたりするぐらいのことだ。

いつか、ひとりで山にはいつて、自分のしとめたブタをかついで帰ってやる。

ジョナシは、自分が魚とりならだれにもまけないことを思いだして、くやしさをおさえた。

つり糸や槍や網を、ジョナシほどたくみにあつかえるものはいない。そして、サンゴしようにジョナシほどよく知っているものは、村のおとなのなかにもいなかった。

貝やカニやエビは、どこの岩床で見つかるか。大きなイセエビはどこのあなにかくれているか。月の満ち欠けによって、魚がえさを食う場所はどうかわるか。そのほか、潮の流れ、潮の満ち引き、あらしの前ぶれ、なんでもジョナシは知っていた。ジョナシにとってサンゴしよの海は、わが家と同じであった。

村では自分がなぜひとりぼっちなのか、ジョナシにはまだわかっていなかった。

ときどき村人が、ジョナシの耳や自分の耳をさわって、なにかおしえようとする。

でもジョナシには、他人と自分とのちがいが、耳ではなくて、口にあるように思えるのだった。村人たちを見ていると、ものを食べているわけでもないのに、くちびるやあごをうごかしているのだ。たがいに口で合図をおくっているらしい。